

私と超音波

渡邊五郎

虎の門病院消化器外科・副院長



[略歴]

昭和51年3月 東京大学医学部医学科卒業
昭和51年6月 東京大学医学部附属病院 外科研修
昭和52年6月 都立墨東病院 麻酔科 医員
昭和52年9月 都立大塚病院 外科 医員
昭和54年3月 東京大学第二外科 医員
昭和57年4月 虎の門病院 消化器外科 医員
平成5年6月 同 部長
平成21年4月 同 副院長 現在に至る。

超音波の世界に入ったのは幕内雅敏先生に引き込まれたのがきっかけです。先輩の万代恭嗣先生、同級の伊藤徹先生(故人)が研究仲間でした。(腹部超音波の巷では「東大の四天王」とも呼ばれていたらしいようですが。)何と言っても思い出深いのは、1970年末に世界に先駆けて超音波ガイド下の穿刺術としてPTBDを開発、同時期に報告を始めた千葉大学(第一内科大藤先生、土屋先生、税所先生、第一外科竜先生たち)の皆さんと激しくやりあったことです。東大はコンベックス型プローブを用いて心窩部から穿刺、千葉大はリニア型プローブを用いて右肋間からのアプローチであり、それぞれの長所短所につき激論を交わしました。小さな地方会での発表でも相手の演題には必ず誰かが質問の応酬をするぐあい、熱のこもった時代でありました。日本がドレナージ手技で世界の先端を走り、しかも十分な普及に至ったのはこの経緯があったためと思います。千葉大学の先生方とはお互いに医学の進歩に貢献できた達成感から、その後はより親密な関係となっています。PTBDについては、当時東京女子医大にいらした高田忠敬先生が「直達式PTCD percutaneous transhepatic cholangiographic drainage」として造影下での安全な手技として開発、普及しようとしていた時期でありました。ドレナージそのものが危険であるとされていた時代に、その意義を切り開いて頂いた基盤があって、超音波ガイド下PTBDが普及し得たと思います。ついでに私が主となって開発したPTGBDの呼称について。我々はPTGBD(percutaneous transhepatic gallbladder drainage)と命名しましたが、千葉大学はPTCCD(percutaneous transhepatic cholecyst drainage)と呼称しました。千葉大には従来のPTC開発の伝統があったので、それにこだわった命名になったものと思われ。結果はやはり分かりやすい方が残りました。

年齢でとともにこのような歴史的な考察を書くことが多くなりました。それなりに若い人の役に立てればと思います。でもまだ外科医は止めていませんし、今年には自分の開発した単孔式胆嚢摘出術で、標準術式として認められるように風穴を開けたいと思っています。春の外科学会の一般演題からスタートして、まず日本で普及すれば、何とか欧米の真似ごとの域を脱することができると思っています。もう少し頑張るつもりでいます。